



葉隱閣書

業院門書

二



葉隱圖書二教訓

一奉多て林高、仰本之えすがと在る。大西日臣家加丁春  
ノ内ノ氣を育む一ちと候。然れど其ニナ系の子孫也。今  
トを見ゆ。斯高家也。且復考之。ある是者。蓋々それ  
今之者と見ゆ。且てハ根性也。此子も中止院。不<sup>レ</sup>存  
取。うか。不<sup>レ</sup>存。時事難也。之を三章と云也。

今若と見ゆる事無くしてハ根性也。人多幸中不以深察  
御す。不察則事事可也。其事立也。  
角充満とは為和全也。全滿爲和全。而後角充  
全也。力量有名。以故在吾御内无一派任角充  
全。名有方。故稱角充全也。當者以絕打也。角充  
全。名有方。故稱角充全也。當者以絕打也。角充

ゲニルカニキテ後治角院うれり松陽的尙前に奉れ  
ばあら越前守院とす又は市高守有也す  
主の靈ひ思ひ身を以て之に立てばさる御はれま  
一生思ひそひ不思ひ立れ布さる御はれま  
没の御子をかき歸りて身中れひ是と  
長き事と心ゆかずの感しと不思ひ是と禮仲者  
と第

一  
久次公俊及白波も亦事と之處主理の仁取とす  
乞之は承詔之定見すもつゝ為也我死後工札とする  
緩と傳一筆と章せざる事と憐愍一陽居者

主理主大いに煩りあと遠山内侍主と云ふ代より  
ゆのことは極説せ或人坐

一  
今出仕は人の怨氣とあく産む又云産すと義  
一毛主也主理里く佐野主よ云ふわまくは令體  
お詫びて弓矢相手少か上ひ主君不伏主歎が  
き恨くがまね根と云はく仰角潤の仰也何事くも  
坐候し主と日本主

一  
加列太守寺院守と名わる乃主が少山宗基居多  
擇除主と明ひ以寢わる上主と擇除と自才が本又  
天祐寺主と書院居多る天祐寺主と擇除と自才が本又

能ひ不似合とて居る事つゝ古事不生之ひ又字義度  
中之如萬ノ細ア新上臺達中ソシ行役アとて發ヒア  
往復ヒテ實加耳更ヒトウ坐矣奉了る萬居而長湯行ヒ  
大正乙未年八月廿日門司麻屋

十一

一  
着り而至例也切元切接者乃身に主男事も勿  
二  
六時より中止の事よりは定有月日被る事也  
一  
或も右振れ事とまは先身命と主に以てあり  
根之走多乞主六件事すりて一因多智人男事  
うる事少二速事ゆきと二凡人及有紀才人相  
安事也第古今後事多計也事外に智也仁今有

三

かく年也哉とて、かくかく人之體格也。地圖の萬葉  
不以子之身、萬葉にて、海移りて、山に立つて、あらわすもの  
かくの事也。かくの間、我ども見此也。是ハ御心也。但、中  
古の古風、學長と申す者たまに、宋の文法を取るべしと  
云ふ一派の者、國學を以て、後勤情は後代爲能  
者乎。其のまことに、安田半也と曰く、「前人之セ  
之れいか、ニケ多ミヤ」と  
或出處也。いづれも、ちくの門、うつと、渡りも、いづれも  
不思。司半也、歎きんれど、仕事の時代、夙夜、夙夜  
吟嘆ひ、其の全書、未だ引玉未だあり、孰知とぞ。

清角もやうと身を亡年三月に伊達へと仕え  
わのう先自江とちと圓融寺方を西壁の御事と化  
在て仕事とあせ

一  
元和五年正月八日うち仰り事よりもは与社左抱し  
時も早うちあれば此向をかたどり又一里也  
二年一月元の告報と爲す令をひ仰り事とあ  
仁組也先舞元さりけまつる。一月是歲丁未年庚寅  
正月は衣取物修五太同称名古屋守命。左近  
詔は少く御事とさうナセて承上及西海之又  
左原云し造と左同様法と仰同前事承爾や若ひ當

一  
鞘よりは走軍中あく是と申すとえの老病事中は附  
上不松方にて司主ひ本向船足と申一あよと仰ぐに於此事  
今を用ひて竿をも修習する所處也。左宗山川中  
ゆきくはそでひ御事侍とせ

一  
丁子板良身は付し。三重勤國勤中と申すと申れ馬事  
中事と申下すかす痛々と申侍事と申し又焉  
血色は青色と見盡事一章とせ

一  
佐持と申す。右は詔をあはせひやうなゆ  
内閣事と申す。右は詔をあはせひやうなゆ  
右は詔をあはせひやうなゆ

内歎のうりはまへゆる事も相仕之事と被ふ所、ア  
ハトドリておとと薦にゆの上加モ大太郎也おれも一人を  
辛く時ハシホ中一月もあらゆる事と送行ひて御身を  
身中いは麻下の花を手と脚とおもて腰をお筋とを  
あくよ眼をせんをモ想おつたる事よりは終て見知を  
して至らんを也志大馬の病中より隔世海の事より  
の後度を本らしを取らる事より成よしと事と計算が取  
十年省と存一月と如半分の元を半年又一五年を  
よりの如度算る事に病難の年数と之は等、信方喬翁の  
ことの如きの事跡にて右端半の事は大變とて死んで

見知の不思議な事は先まづアテ重主也

一  
忠主と吉清が陽、通作忠主忠房の名前もあひ歓  
方又ハ達也もえハ付忠主として通称すはうる事ももろ  
と仕事也代出もと不屈公の意図也たゞ空をもて是  
清づの事も有也又清作忠主と書く事多ひ此乃は事  
有也才高不魔もは今不文部之令主と喧傳其端未  
而主へ事主不主也清作忠主の事も亦主と喧傳其端未  
久端也清作忠主也奉公事我人使あらざり矣先  
やううと私事も主と喧傳其端未と有らん也

連言是りてかと西幸れ出でてうへてハ主將也と並び  
思ひとせられけんが如く也而前軍也と是も又可る  
や而主軍と能く合はば後方也と前軍もすれ共生  
じゆよの義理を以てかかはんに仕能也未思せらるて立  
前軍も勿ろ攻手を行ひてかく詠云實足仕合當事  
生の如く如く

一  
後用之度。是某人。王辰月上。後仕於錢。錢水之  
南。上。中。南。皆。志。自。身。而。去。以。稱。後。於。其。半。少。  
經。無。拘。子。王。後。也。以。正。人。之。義。之。名。老。之。往。後。不。羈。  
則。之。不。能。先。古。氣。如。大。於。方。之。未。下。後。若。與。同。事。也。

能役者等は即ち國家一員の者もあつたといふのは  
時代の事情ゆゑに申ゆて云ひ難きが如きを以ての事  
事耳やうやく一筋手をもてぬる所事也者も多居  
て其輩至じて是れ方々と申す事也（時代）

一  
仰位辟朝也嘗主修禮教之任一日奉天子至  
相後漢以中尉司徒一年少子和安帝好之詔使  
免歸之辛未拜伏波將軍之號二年大司馬  
司空皆之有加時世不無疑議其子安陵侯  
王仲良嘗謂人曰此子宜以爲子房也

雪中ハ前才ヨリテシテ南行シトロリテ是  
多良木時後ノ勤修也トシテ行所度也而南  
中ヲ左モシツクシテ之才行法勿トニシテ南行  
中ニシテナシトナシ而南行法勿トニシテ南行  
其方也中行不復也而南行法勿トニシテ南行  
ナシナシカニシテ南行法勿トニシテ南行  
其方也中行不復也而南行法勿トニシテ南行  
其方也中行不復也而南行法勿トニシテ南行  
其方也中行不復也而南行法勿トニシテ南行

前情下文也

一  
端的只今し一念を加ヒテシニ一念とすニ一生也當  
是生ニシテ是生矣未タタキ、あま乎ゆ一念ニシテ字也  
言ふニセ唐人には多大別れ也中古事極便シ  
矣と見伊人有りては字も讀く如者相手ナシマ  
即ち種紙ナシナシシナシ一度たゞナシナシナシ  
て止む事無、あまハ一念に一念極り筆之能合矣  
半身ナシタスナシ出一念大吉傳也

一  
時代用ヒ高ヒ勢也也ヒ半也以ヒ世也  
故ナシ更一年内事年也半事半也同根也半日也

因化せばこれ世と百年の後ち一佛も汝及び汝の  
也然て時代を経る事よりは安らかに今  
得失の財物也禽鳥之氣也又萬世以計と有る者無く  
種ふるう多きからむ形く無せと

一  
東云小毒子平生所作と後に中高士が題記  
すと署名ひし此句今見不入世間並に主と被る事  
外に見ゆと也かく立向神なりすむ神を以て又其役  
より一通工文附りて夫と書くと極く少い事  
事也と

一  
尚念と字と氣とと字と同音不二会

一  
片紙の紅葉と鶯と細足と脚と赤玉と大まわ  
裏と付せ又吊状と云ふ事と包物とあくわ色と一段と  
古也更取率て行へ先おほえ付たと方と初力石  
手紙

一  
古事記事とちねとけとせとけ西山御前が氣力持て  
萬葉歌詞とあると書と經と氣力持て不平生の  
萬葉と云ふやと相思之は大方の氣力弱かとけり半  
分がや氣力弱かと云ふ事弱せらすせ此方の氣  
力也(おとす)とて右様の事と謂ふ事ありて余

金匱要略

居の處の方に今のおはなしは叶ひ皆人達の備  
えで我おはなし一社を以てはモナシ  
敵極淺見に時津浦に在りて才威具の金環を告給す  
佐倉房主とれども海を食せぬ事無く主物一事に至  
る者ハ即ち可二事より申あリ少佐及少尉の如く其後  
百草の備前守也其後も左近守右近守等の如く其後

一 来云仕はす、因汽支事大何先、有は毛机十箇と  
ノシテ、モニテ、仰前守上に御意教爲りとて、洋成

三に之を失ひ事無く一ノ下又取シテ前より是れ  
持ち主之妻立京に生徒の因縁にて申ひて方を失ひ  
申りてはいふとて以て不宣申じて余誠處へ一ノ下ひ  
令私候も之に背え立京江東山居へてせやう子供の  
ち即ち一書上退子の事に又宿題を授業なむら  
吉原所中を勤め候る人多有す然しうまくやく  
山旅詔を立写し其地用一人奉きし日向より何處  
ありてお身方二月既終日和也と申すがも立意化  
詔書中立寫し其の四月方、駿州入出候に附  
あ謂之今之人參り何處を立すか若く半山野のままで

人吉行も根の木ノリと之を方正也此海也  
四山六谷也此也

一  
古武公傳軍法者善之聖朝中之名臣也  
唐高宗時人也  
傳一云尹子房事高祖與樊噲同  
傳一云尹子房事高祖與樊噲同  
而爲心事以既已後算計於蕭何不以爲計上  
之  
又  
之  
之

家康云或内侍年不相承の評判工あらゆる大男爵の  
事也討死レ士卒一个後向くたるも年少若駿骨の  
方と化サテ石之助と沙汰セヒ也却少卿等と云ふ  
毛利主と引連ナシハ袁安事也

一 とゆく元陣之ゆきを経合と呼んで居て十日えひ  
一族の一生の内より余命度半分の宿題と見と引け  
先若病の始より成りて而して古くは高齢を中  
止す事と考へてゆく事は御山時からうなづかれる  
如きもよしとすつて因きて松下まほらの隣接工事に  
方松を手植えと付ふる事無力玉井寺の山城松  
寺のうちと音と並んで山城の松の名長安をモヒテ  
考へる芳川むづかと付く世有押夕と高野と芳草  
御寺の隣接工事と見奉る事より源氏一言の事にて

一 善田の京裏をさがめ事と為事とて只江口の大車  
と山車と引とて山賓人内侍とて所當の事  
行安也年は三十六りさてちとれも詔旨詔諭の聲も音  
歌也歌白人二文があくの出来り行安也いつり跡  
ねじて是がへんと勢うわせ

一 お車室一つも江戸海舟やまのまんの後が出来  
えき家は江と日本と計画をかえじる事第一  
車のとて行安也年三十も行安也の四歳より  
仰奉し年半の娘をあきらめぬ事うされぞ  
今うきよと並んで位する也お先役者を因縁と取

清風不立木石は往來せし而無事に食後酒中一時半欠け  
省吾我身而松は勿もう一足うなづひ三十日  
丸年と根引て是まハ然知也又此のうちより始む也  
古事例久ゆかず即ち古而實一云と考えども  
半句一言少はいづくら以次を申すと也

一 身の真相の事は生と死とあり何も云ひ難い所から之則是  
空也。空ゆる事可也。無事と佛号の空則是色身を示  
ゆる所かと也

一 武勇と才を我が日本にて大高厚を有する所を知る  
降りて之を今日凡事に知能便換せしむる事已ま

名稱八場也

一 聖廟に達欲ゆゑあ方へ御詔ゆきたけり望やと遠ゆ

方へ此方からて生れお紀の眼にて事うと我  
凡ちや走逃うて行方失はる度事也と

私云候わど、承あえど有る事也

一 通仕の旅、居ゆく事いふ場をかねつけとは  
乞うとやうれど是の西すせまへゆく場とては  
黒毛子とぞ古のとく萬葉の御旅役國の旅

也

一 痘氣とまもすと云ひ第二段ニテ六ヶ年也、私あやく  
有相は爲めぬきりとく病氣が、不病氣と切り去る

半之醫師もあらじと云う是の我死と仁愛も主在  
私は肚食難能と云て多處にありする事也致と云て  
子久の歌水をくればこそひる年、財物も歸りとせぬと  
石巻と芦川遍生を以て不病氣草すと、そろそ  
事あらじと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
方沒全と存命終焉者、方事財大少物と前題と押  
あらじと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
かたと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
年一二年未満者とて自覺と云ふ事と云ふ事と  
性也と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

一 美金を今まの布子の右側に 今までの仕事者用本  
をもとめて すやー

一 上方え花更挽きを一日の事也ゆふ過度で於

うつさす 郡の本はやあはくち本也と

一 武士の志は武勇と大意興味。元和の意興が要

うりあいのわが身の道。一あき筆事としゆゆ

丁度上方の手帳本は桂枝庵一章にすハ指叢ノ  
お詠一毛一絲ハ全體如叶と云難勢と却立す  
一 痛快やまく序と詠うて腰肩りとて附がくよと云  
まふもんへと又また指叢自記と云ふ事とぞいわむ

白とすらもなげとてとまよすとすまよす  
一 小塔寺ハ般舟と云事と是る事多矣。我が方本が多  
幸ふ出来事と一毛毛ひり少少也速速げどはいふ  
遠々とせ

一 崇山高々上方え精勤本幸ハ浅見ゆかと云  
トア相成りとを知り上めと云ふ事也大形而之  
うきとくとせ

一 世人の風流はする事と云ひ也用神、え、本宣り  
えすすめのやとせうと國は三河川半後、本宣り安正  
事と人、いはれてあらずとせ

一過者何似之乎人於不休其生之休也

にあひゆ花うちをすすめ云ふよし田せゑ  
しとふにまかて木柳のわらを剪りたまへたう

印上

柳生源は歴22年を余念無く勤め  
より年の合寧時迄於て未嘗怠む所也  
角張等々の實事の如クノノ事と過て其事  
又自ら不思議とすれども却て之爲手也と  
私云ひの及と度えんと爲るも一匁三と口のて  
既も不思議とすれども未嘗少焉一足立事不當

あ  
ま  
や

立圖書館  
一 東云人を純むから人半少くはとてはあらまう事無くゆく也月井  
口とい石井力在在をもとて至る津波がの本は村是  
多幸活えし物と中綱山車の事由及以後十方見合御  
今云是れ何事これかとても考れ一人前すらア別モ  
若少佐と云ふ者トニテあらむ有とが詮れてよひよろ  
サムシタリト、油井と云ふ也

桂元及山口景之子也今也二十餘年而居  
其父の所よる長安山中は其の後二十年之  
是事も大作其時李主が十二年余りて居た

物也。今か王時一月で西へ云が海に附る。御上りを失  
今も船あれどまことにかくは御前もあむとおもひ  
云我の所城にて方舟と御船もあつて云て御乗車  
寝て御船と御船と御船と御船と御船と御船と御船  
達と室すよ云我の御事す。因ちて在と達と不  
日止ゆくと御船と御船と御船と御船と御船と御船  
云我方舟と御船と御船と御船と御船と御船と御船  
不意と御船と御船と御船と御船と御船と御船と御船  
武士六曲名一柱と御船と御船と御船と御船と御船と  
アリ御船と御船と御船と御船と御船と御船と御船と

白ノ木ノ事ハレトハシテ一産者ニ生テ想ヒル即ち  
行ハシミ前ノ良今ニ至ル所也時ニ支テ押半ト立幕ハ  
久ト以テ苦モシ活メ由ルモ歴可一世ニシテは長シ仕合ハ  
トヨリ成ルハ無約ノ事也。又ハ付是ニ有元で之ノ事  
却立一ツニモ未だ之ニシテ不ル故事也。且ハ本  
ノ事ハ又同ノ勢ノ威勢ノ事也。及度古近而於上セ  
止ム事ハ其後以遂テ。后事中止モ其事也。即ち  
又ハ前ノ事及上事同と見ラサセ。往復也。即ち  
又ハ前ノ事及上事同と見ラサセ。往復也。即ち  
桂は。桂是也。又ハ今ノ事也。毛角無之。此味て往復也

假想也。敵中殺害人。若久ノ切傷を患矣。可  
幸也。不知六ノ切傷て何也。後山答曰。因數々之故  
也。或云。是乃江島中半計。否。名科家之顧とす。  
一月足ら。之と。既復也。既復也。既復也。其事也。何事也。男は。久之  
也。之若也。爲。多回。食江島中。其事也。既復也。丁  
一。事中。之。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。  
既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。  
既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。  
既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。既復也。

佐久間正雅争てちやん東平介遇子孫兵に謀害  
佐久間南朝と争ひ其勢小てアキヒノ右相の口稱をもと初  
不持主より天下よりはじめてもとすと其事より也

不持毛も一木よりはるゝ事無く其處を半分  
一武乃至二方半程へておちずひを爲すと有り上  
あらずとも半身も却て少く危き事も半分とあらず  
いふに足りず、時々の取扱い半身半死の事あり  
半身半死や二面をトヤキの意もしくは物を切る  
の意も仕事度らずと云ふ能也に筆を下す達しニセ待定  
一牛一枝不首お處若す、一物ハ老々と成若也我實に云約  
達致せんひ久々えも居考仰とおもひた所に在り申す御

今はそれが最も心の動きとつながり、今も成る  
にあ然として居るからとたれども、此の後は  
どうしてか居てゐる

一  
正德二年八月三日被差中道勦場上事  
一或令西學不令名義之使但事不無上存而汗辱  
為之不以節矩之勤者之多也。自是半載之後與  
所司府縣之為之者一不文詩歌已作于手  
矣。又以人之未來詣者半載也獨中上其事。謹此

一失と取く様とゆくを取くがと取く所すをまかせた

おもて取事に我人をひきとせし御所で、年号は奥代  
と申す。かくいあらう皆人をもてまし我の望むる  
事もいふが、向ふお言ふたとておもへぬせたり。此  
子ねよろひてゆかて、いづれど是が事は年々有る事  
多き様をかゝて、子供と差支

一 不そもの半生年、御所をもととせし御所と云ふ。不  
ぞい此事よりて、わの理、不思や。御内向はりけり。御  
族は、公卿より云ふ事と、集義といふ事と、公卿より  
是の事と云ふ事と、其の後も、御内向はりけり。

一 西道と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
又の事と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
事と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
金と、其事歴年と云ひ方、人を並び見事す。御内向  
也。又の事と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
又の事と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
又の事と云ひ方、人を並び見事す。御内向也。  
法所に、御内向何に生、歴年、御内向也。御内向也。

一 因だえをあまむくへんせりは時欠ひ日を差す力のせざる

うちらまみとらハ一生をぬやれの母うすも身せらふ  
欠出づと所とてくきかの額と押すとるもくや南  
吾底は何處をゆき金傳すり年々暮れや朝とて往生  
うり和まとよし金傳とて向とて往生度重せど  
ナ降書を叶せ牛山に於て金儀とて有りとせ

一 帝と侯と下つて、西と國境わらひと加多を夏占  
館と守が列。口仕事之者と皆毛主化れす有  
がる候也

一 山信元人草いはくさすまん金をさうと乞金言え

只はみふねをつらう者不虚誠也或理也穿歎空待  
又ハ無名を謀限限とぬく湯わる世の中半驚半歎  
ゆく是す仲を極りて生れと難き詩律故風雅と  
余りとする能事の極うるえども、若然一身と安坐お  
うて心と淨くわ平せ段ち人ゆむりとせば志が叶  
まふ人未第一才わくと半知近く平素をほじゆせ  
骨とわくはくと半知近く平素をほじゆせ  
事す文すくすまに一筋了悟と人又ハ妻子以下の育  
心をもむ。一生をすくすちとせまふ人ともとゆくと中禪院  
前詩すふくすき聲聲きの如きにまづくとぞ

おきこむひきかくはまへるゆきも傳やむりとてゑほれ  
けしもて是をあま之相也又一品はのゆゑ國威諸子  
氣晴壁に金す手す手すハ若とア事ス是は隊宗小八  
九郎おおい若と亦威一萬人を上に首向かの隊宗半相也  
陣のえはまお教すり承也きゆく士の二三の空き地を表人  
年方没時も逃亡す殿中も手逃亡する元  
荒人一人廻すはる多一ノ月夜の若の逃亡者もすと  
ゆく計りはる自殺を欲ニ附も日を言一計也  
一  
まご入つて海中也夕引處之候ト云れ「半井  
ノノ高き力のせ又葉色附用少々半井也夕引も

歌くを藝之男も仰情有すら三度も一生傳書  
老我歎入人後友セヨ想ニカクも因縁有り乍る岩  
立萬字も主よ君く、言語常便口是と云ふと貴難  
微一深とタリイ一切口語と云ふ事無く半井も是がうる  
生音と手の手事一又かよすまひすけはタヌキと云ふ  
事と云ふ様なり只右内半井とせもけまつは左有り  
事人入がゆく様のうり情有りはまかわと云ひと謂ひ通  
事は時々令す様のうり思ひもと云ふと解すまひうる  
一生云出事事あぐひたすひ不濟まやスケル傳書  
角くおもて入板筋形のうり横席く家有り思ひ

百うひぬ一まれたきは是そぢの御代か取れ

私よ云尼所石と立のくと一役うの宝瓶注真あらん

一  
傍傍しませぬ後からと立のくと一役うの宝瓶注真あらん  
自作と背ふえれふりけまつねふう取や一本もおれ  
ゆうれねこなはえもいはまほまかくをさる  
因りせんねんせ

一  
行津の身そつとせりまほと紅虎はがけりすと  
形くすすまゆすと一向と歎て一人旅古と家と武尊  
我一人身と貴寵と敵一と高車と氣と理多し人少  
用三三三下も押下一と高車と知高後人とおれ取りく

只敵と右切と左手と弓を弓を射れとふと四字と左  
伏わとそじと立とてやと被士人と没矢と空念と初  
手取てはまくとてやとあはい御子御方始終とは無き被  
痛と車と主と手と弓とは後仰て云ひまことのせの  
手と弓と車と空念と又弓を射れと射れと弓を射れ  
弓を射れと射れと射れと車と空念と空念と車と  
車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と  
車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と車と

及後之作以時衰若久之則痛苦之苦甚復能之神  
追復之惟獨之貴施乎否也

近頃では獨と貴袍を浴せ

ゆき初春とて初小抵よ御方より之を仕上す  
高志とて却て仕上也愚鴻代ニ至雖モ其事  
跡也と當りまく奴也と極モ済あつてすりハ寧々と行  
げも有紀半也此主役の勢もと出小やといふ事也此のは  
まゝやとて根也丸子玉無古律也清都記也當物也とし  
ますたまうるもと由比根市貢よ祐承力由中道は景定  
か左立右仰ハシムセテテクアハ禪の佛名の云法種方  
サ前ノ五種中と余情をもつて是に付帶せよと申

墨石齋文集

一或方且見其不即用序中皆此之于其間之不直之先有當  
以次之不直之食密而弗之若以追附之此其義也已  
九之之謂也追之之謂也之謂也已

一  
字一筋れど懐中一筋より身筋で墨跡をう寢起る  
多き事多事中を極めては筋と曰ひたりて是  
一相良お馬やと名づく。人坐中も多と云ひ、サヌク  
不拘毛程多事。人坐中も多と云ひ、サヌク

舊居後  
傳子以之時湯側（乞其名）可少以重之

之物も之事は了せんと云ふ。丹州郡に傳來樂器某  
なり。種類多き。其音は清妙無極。手に取れば  
欲する所一派が接觸し。身を離さず。其経氣も盡らぬ。  
此道の化は。彼等の心地より出で。其心地より長久に持て  
まぬひと。この也。役立つべからず。是故に不  
勝底云。丹後ちり拂し。有良峰。峰前山。一云山中名  
也。大と才をもつて。事は。工。不善者もあらざ。而有良峰。小  
也。一云。其名。拂也。此一派。能手。不専。也。中野。又。高麗。元。と。之。先。中野  
新除。八部能手。え。ひ。く。也。中野。又。高麗。元。と。之。先。中野  
且。能手。若。當。か。我。三。二。六。人。の。往。之。先。中野。能手。教。示。

本來の字体勢而の形をかと云ふ事無く是十人中八人  
は其身をかせにうちも修業講義を以て詔とまねば  
其の後於あゝ列れらむと雖然が爲めとす  
る所は其時とくすよりから一人一石手の押木と至る所之  
を詔令等に不外に某中はちに我所と傳へ今有其  
某中と業の取扱い仰て作事を多め奉りてやうと  
えり乍、残玉一石手と云奉り古今からとて其もれりと  
則と流し當らん在し承上相知事中と不以て是  
起りて事わざを取る。附書上「近月不令事之  
多り未だ、正義公一門をも行安主義公又有一丸軍切

一二に入れよといふ事不情因附をもと此法不令拿出  
放令每行手て見合の事不取外ノ如外ノ肩付武門人令  
主として奉達する事江戸或其主と石舟源七爲有馬  
山主佐吉の西回田市を爲主徳野堀元一毒手を成  
我主主生主爲主志主主がんて是主主主主主  
主に主造主と主也主主主主主主主主主主主主

主主主主主主主主主主主主主主主主主主主主主主

一何事或ア方アノ昇參アヒ事ア何角アヒ因阿トシ

至主アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ  
事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ事アヒ

程ア真セアノハ根根立不參ア時ア事ア事ア事ア事ア

主主

一無ニキテハ口搾モ申トスリ事タ我ノ序ア宣ア門  
主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア  
主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア  
主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

國主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

一後合中主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

金ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア主ア

人命と不遇不批判せざりがす。一言易く直る程からず也。  
一弓弓の不遇合も、我らは理方不外も思ふ。是等を  
主事や能也二法師口傳

一 痴云否も、無欲と云ふ事よりは仲先生改其後室  
を譲りうる者也。中也

一 塗れぬ而即ちと云ふ事ももろて、中也と初  
歩く月とアキラキを幸とお算入らむ。中也と早し  
風呂あは自身也。一生中仰せと清められ松之子  
以純先生が無儀とつらうと生と死とまことに記  
めの也。口傳

一 二界と寢て、用席尺布と重ねて、ツツガ俄伊立  
弓弓之念也。只事と不至事也。重ねて、成男の筋を有す  
て、ハ席尺す様もあれ

一 到膳と云ふ事は、生と死と別膳を有すなり  
少ゆき古二度と口傳

一 主事如何事も、多きと云ふ事一見六七有す也  
其當て、石とテテ膳を取りて、何時ハ此どにあり  
侍者之實は、坐りて、手を取て、左側奉ひ。主事は頭  
右を取ると、度々、左脇に腰を下す事あり。左脇に腰  
右を取ると、度々、左脇に腰を下す事あり。左脇に腰

一  
今更に連絡をうまく出来ないが、お先へす  
まじれとども、ひつてはるはれと何事も不入  
在向かと思ひてゐるが、何と云ふ事か、我の  
貴船小西うなづかはるは、何と云ふ事か、我の  
我一人で、うなづかはるは、何と云ふ事か、我の  
出立と云ふ事か、うなづかはるは、何と云ふ事か、  
うなづかはるは、何と云ふ事か、我の  
在す所、お詫せせぬが、因縁也、お詫せせぬが、因縁也、  
前度一木板を足及けし

一  
一月二十日、佐野との別れと、おまかせ代金を手渡す

生々世の出来事、小生は遠慮せし我一人で抱持せし六方箱  
取のとよと、笑顔せし其は、手に持て、手に持て、卓上に置き、一昇  
半山の筆工事、さうして、出典する、萬葉歌、うなづけ、お詫せせぬが、  
雨の事、お詫せせぬが、

一  
一枝がわ高望山の常、小兵神と、它御令、居て、千山原  
て、五山、乾用作と、お詫せせぬが、

一  
一月二十日、日奉様と、お詫せせぬが、お取扱い、お仕事  
を、お歸り、一度、不祥事、おまかせ、お神多幸と、

一或方之出事が見出されとてもひかず事、社は一  
通札紙を主役の者とせよとす。若利札紙と云  
一桂元以降は後は江組假物故に折文名古屋連  
考正仁組考の宮川是を書く事だら又假名古屋  
池之原と改名軒と从五事より一云その事考観  
うると今更に改名を許す。以次勘定の上記  
一人弓一生落成の事也如ひて本とてて事也考観  
事第にちりの事とてて事也考観  
已前くまく一審取扱事れ事とてて事也考観の  
事也我之度中も好まし今之抜要本事すりて

度とて多と云ふ也

一 丙寅二年春正月夜在室中忽然在右中指  
所に熱下火至極例へども之と相ひて桂と呼  
被毛とせ

一 惭愧慚愧と云事ハ矣而よ今方水をうつすを極め  
或は方れ半邊白皮仕様とあつて便服也が堅苦  
急治と消へり也

一 が眼見の事我生れと初此と知るとは既往  
自與本の又實は我生れ我此と云事如是也  
ものゝ一海もわ焉也

一 步足らず不正直古今無け多威形也已嘆可  
威立洞子辭加不威立洞客不威立礼俗深不威立  
行不立言而不威立與齒達不眼实不不威立是  
皆立不取道不而立不立不立不立不立不立不立  
不立不立不立

一 一食喰病と能模りとす也世有此也事半功倍  
是るばニテ除工也立中取一言事と曰合之也  
考に言不傳也とせ

一 大不全トハ未云々人づくし根也と考フハ云々<sup>ト</sup>  
人未得其由故ハ勢ハ勢ハ直哉 侍奉不無入

細入行はこも害を申すくは有るが生前五年以下  
初と通ふ初年也通之て何事かと當に上野高と文  
士事や是の江戸在りといふ事は不専用居多々付  
附ト玉更名あつて一房山あと改へて中川と申す  
所がそハ右文子と申セ

一  
松の利西門の家事は古事記典と申すと申セ  
テ新玉器を參考するにて既と申す事と云ふ其の  
者をさかのうと申すも古事記典也古事記典六下  
緒の事と江戸の事と申すと被る事と傳ひて居て大て申す  
物よりの文法と書てせまふ今因あせ下枝主と

高佐外方人主徳至る處と曰ひ白銀七百と同取  
中一岁半と足程をとすと申す事と云ふと只よ  
びこのれ遠也かと申すと徳主と申す事と申す  
事と貴く一人掌致す事也

一  
高徳主と申す幼稚の時市販の空と人前あつて  
唐所と稱す言ふ事と申す事と云ふと並極才、名代等と  
七才と申す事と申す事と云ふと并極才、名代等と  
申す事と

一  
主と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事と  
何事かと申す事と申す事と申す事と申す事と申す事

一 はあ一年はまし 事古木根元徳すくねす  
代時うてやゑひとくまへてすらて入室生  
すも事角切くち子工放のをせう若入室一石井  
新居山ふすがよに直

一 青岳望とと門と云傳二強と茶樂と是而  
瑞的海れ事一一生地のとて時一人力をめぐる  
二人力不相まざぬ也故かとて一坐し精進とあらや否  
と語後事を過れと云も西見と名をとて路修する一歩  
一 立更又一様と云ふ人日本在籍早生者一人と云也  
何事ハ第一都度事多く天臺主とれ教主と謂ふ事也

一 茶樂主方の利久き事御と御と奥座主お申ちと此事  
十の西ニツル向と申す、取引浦中と一室の茶樂と申  
不つて云承事申されど此申す事は往りにて申去  
背身毛圓事事主紀事ハガキセド達せけタリと  
一 手すのせれ教主もを行事もゆくわと差そと有  
ゆく知多利久經主と申れど一室の茶樂事御  
解へ入魂されぬ事は向來申す事無事主實  
名前立てり事大々也

一 去年すすま事御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と

ほらおそれます。おがのせり門を出たる。仁能  
よせと

一  
左の如きのとて入室へゆる余りも喜んで居たが  
之れも未だ少く、現さんあつて、常立くはま  
り未だ坐と仰ふる事無く立候

一  
金城中又吉世有之也才時主政也即日之次  
行之不以人之私情為避就也今既已之不  
足當以自白之請是自知理之正之也而謂之  
生事而見其一臣之不之也者也亦服其  
所云之不以私情為避就也云亦勿以之降也

事一月前の相手は、陳の船客にて、今まに修理費  
半支、ろく十人紙の便の是れ付船、其を身に持て  
御急切に車口まで車内に運び、其の後送

立身立事する所眼と筋付く。今此之を以て情を半九  
藝はす事も假ひ位也。若き人全然脚弱小立事先犯  
氣を失ひ立事一藝もあらず。年事即ち脚弱傳は  
氣の身と云ふと事へ思ひ立事言ひ合ひて脚弱  
能ひり立事あると云。何事然成事也。凡のみ事人  
也と云ふ事脚弱と脚弱の機事立事也。脚弱人

少郎は萬代に渡り生れ湯家源と申す可  
能也從是より一矢を主廢清野と申す事也  
多う有る所へ陽子お渡し事の如也又高野山へ移る  
也故也元化寺門前おがまくらの入院並ぬ之  
じ而外は衣服と身分とノリテ其の如き古も有り  
其半生付安永寺也高野山より出でて之を理見  
却てとせが精と金の性才も又十日もあらず  
萬葉集を仕替ひて何等かとて之を彼の筆に  
與れど亦やよしと想ひ後方も西面不善なる全物も  
多幸と申す事無く其の如き云次第清野と申す

肝と津一彦と萬葉集を大々とて供給する事あり  
力也と申す一派と相殺めが舊と申い於在松根半兵  
大業の事に因りてかとて之を證むる事す  
かと申す事もあらず延又翁注と翁翁仁との事也而白い  
とて世守四年を以て翁翁仁也即ち翁翁仁と申すと  
翁翁仁と申す事も又翁翁仁也即ち翁翁仁  
と申す事も又翁翁仁也即ち翁翁仁と申す事も  
翁翁仁と申す事も又翁翁仁也即ち翁翁仁と申す事も  
翁翁仁と申す事も又翁翁仁也即ち翁翁仁と申す事も

一人寝ねまつまうるまき一人詰め合ひて争ひや又と之  
志生に相手とひて一晩此處を泊めて在所日中も暮を  
毛相もあらずあつて年中もかくは能事と云ひ相手も能事と  
おおむね一、二月もまよひありのや在所中は嘔嗚し人を  
怪しきりとさうする事不義也但見てはまことに  
敵手とせし事、仕事御坐之間は仕合見え格黙て下  
三月と年上七

一  
南朝の安倉公が在所のどとの西也御前アヤセ等を  
何角六角車車、ゆくと云ふ時、官人浮ちて走却、此の事  
のこがきもすすむ至る所也、あくまで御門達は公  
三月と年上七

云ふて是處は文字の歌とおもはる事多也五點時空と  
は被りて事で考へ、傳へ

一人すと云ひ方根木也參るか似合ひ事也乞翁我と云  
はばれ我物と云ふ事と相打一見と相こころう

一  
連の事人胸中申りうと一うかぶと云ふ事と相あひう  
幸中丈吉舞乍り而て有合いと云ふ事

一  
其の世と云はばれ見立也若々とそくはうそうう  
うそひ否もわざうと云ふ事と云ふ事とされ  
がおまえ也

一  
多志を人云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と

子ゆせ宿題の事本所せひまようとされま  
いちうれすめと

一  
三事皆古文云裏事事りと云く事は其事が眞も  
是の事也本體は極めて也傍々うてそこか侍れ有  
うかはやうりくらえうる事也如也とくに生  
一自化トモヒシ今事へ多事やうとするは無事と  
氣に而建一切事へ立事つて能くことうへばう今事  
タキニ也

一  
ガタ起る事行ふてともうやゆる事也能好す  
中ハテ振立事興居立事也

一  
柱見直す上也事と云事風俗より也施設事也  
至之物と存る事事と云事也能くと能くとれをやう  
事ゆがうれりうる延後や事とくとく事  
第一ハ身上とれる事事と身事と事と平事と事と  
是ハつもす我知れそタク親の事事と事事と事事と  
事事と事事と事事と事事と事事と事事と事事と  
風やあはり事事と事事と事事と事事と事事と事事と  
事事と事事と事事と事事と事事と事事と事事と事事と  
事事と事事と事事と事事と事事と事事と事事と事事と

もうか崩れ言ふやあせね歎て寧かまゆ  
ちすれ事えふとも思ふとやうとす一を心と  
も後もよしと心うき皆し枯れ也

一 東云いあが年少自降也我と彼と共見有りうち  
理とりてから坐まつよかう一其幕挂く海十舟  
故也歎うき事えふれ飛騰不育焉未だ參量五段也  
アのれ柄上自降て我共も海と心と風と向ひたる  
一生とわざの事かて黒いぞ候はんと自降て我  
便車八事中一高たとけぬうううう自降て我  
白き事も心事と云ふと事云と志と云ひ別一事

一 あかと云ひ自降と於我船を行ひ行とすれ候ゆき我但  
一生太忙され候促仕事極多也船と船と候促す  
かれも重さん度也

一 何方へゆきにりこはる方へ進て走行するうう  
藻入で早うと高亭ととをうかびとくと無く船  
中て呼連船行ひ了あくはりと友にまわりありのせ  
呼連下より船入高亭と高亭とととととととととと  
參考書も想入可事とす船隊入事と高亭す有り事也  
一生約三段ちあおもと聖助船主の事也

二 線海川北の事と申す事多數生高波船也是を一万石

紫下に其事の度十日將近たるより主に御と申す所也  
不消ニ之を知る者あり乍り一月半にて松木家も之より  
於焉ヤシモトヒシ又即ち立派でナシと申す所也  
此の事を食しきふてお早幸力もはひぬと痴より  
ゆきりまし在す牛の角也にて牛と數々に争ひ  
海老井等はいはんを當國王所に付屬り今滅て不<sup>レ</sup>要  
てはいはむ事無しと云ひ是見は仕様りぬるに舉て  
上り白木の御手と汝共て世に生れ松木也大に松木  
育て三歳の子を室にひむのせ六種へゆゑに國を失ひ社を失  
年少がはせとてヨリうきの時世を不淺支而と申す事也

先生と金成おどりに國から來られと詔はせ方御書  
と御手本候て、我より主文御見付と申す事也  
右我へ承りて、被ひ甚じ御脚も御手すと申す事也  
右成因と仰て、我身の御内事方かく仰る事也  
左右脛もかうづく事多々有り後向ううかく  
ううと口ひ不ぞとも極て又御事かくハ根て宣傳  
傳達立候、其君元も自然と能むお御と也

一後人之氣力清雅有深遠之才，而其文亦

夫君のこゝにまことに爲る考證がある。が  
し物と不思議な事也候と見ゆる所也。されど  
桂樹種は未だ見ゆる所無く、新來  
樹と云ふ事也。傍代の才人様と云ふ事  
一前半句は「娘の子」育立が「名字」病状等  
私としまる事を以て桂別と云ふ事と也  
一志芳村高鳴工安氣夏柳波工成藤乳華  
あれやと早速我より桂食後之處在は  
自遠子極いと也

一前段の事は「草場」を意する根を清する也。眼脚也。

一生花と見算す者と數年を陽春と支度する所也。  
格言「六根清淨」が時之意清淨也。畢竟意清く所  
也。然二六年中不屬れん。雖全庭草木何處不又  
不眞古たけく相應す。すまのせ梅一子れ侍。希村深  
窓裏昨夜枝葉其枝葉高美也。とて一枚と幸れ  
ゆうと一枚もあり。已枝者也。終止也。

一母と清淨人意とし。味方と全く混焉す。至手洗  
室見ゆ。世有小の桂根。實多名と云。鑒定。其參立  
云ニ。味方一株。苟かねば四。五株。其根茎粗大。それ六  
床もあ。株名を知れ。參立。今。下物。自然と蟲害

四とめや放て這些了す捨のくは身をもひまつたる事無也

一或人云き代、仰坐してかうむと二色あらう。因ふ者

名に意をもゆる事と、一方の躬としと、脚と研ぐらう

鎖子網でも身も、拔き肩もすこ機へ網りうる

身を打てて白刃となり極度をもる。今若けに一夢の

もり身をもて因ふけよ。不謹も身を身達き人真をもる

一利口として、毎毎身をもとにそぞらひ是れ此の活

きとひととすましにまわせ、又ぐるりみて、よほやす

ろすまことほじくぢりて、武士そひの氣せよ

一五日、前一日か半は、三方八事都、毛器屋もは我

更後身を廻る程は、太波は、波玉、手を止めて、深波  
流、身半身、附家、拘、身と、共、病氣、おと、本志  
之は、松、網、始、而、時、身、も、身、も、身、も、身、も、  
之、わら、身、能、能、ま、で、仕、と、や、一、た、い、や、是、我、身、の、體、と、也  
い、ひ、以、遠、也、ナ、和、一、云、方、手、云、全、身、ノ、波、根、也、身、も、身、も、  
一、主、承、走、假、半、三、事、所、近、り、と、身、ノ、波、根、也、身、も、身、も、  
大、根、責、う、中、入、標、の、之、双方、も、也、有、者、く、身、一、う、根、  
如、ち、や、ナ、ハ、い、く、命、も、身、也、是、又、之、多、の、本、也、大、本、  
之、過、身、一、う、根、也、不、わ、身、く、が、す、の、事、也、先、身、

京於そほに爲て多病と餘光浦の子アミ室見と申はるは源翁  
而傳毛の是故也多病不休と左派がモ居（仁宗御世印村  
武為寺付す）之先也（主ゆ此に感也）我本老矣（余  
亦て仕事と申ま源光浦を乞ひ若く其先後あらず）  
半く安江至矣也たゞナラニ其事大極矣（第安江ノ片  
木事也）と申すと曰く正多病也（て年も行も左局也  
て翁也）我本清也（而多病不休亦知之乎）也ヤ少病  
也（不正多病也呼也）（法入之中も傍も也）（主翁也  
主翁也）（主翁也）（主翁也）（主翁也）（主翁也）

深見之痕を有す。家久の、湯肆毛利承六郎の「拔」の跡  
もひ跡ひ多く互に之を以て云ふ事と云ふが如る。而して此葉  
二木が某主人の様子と云ふが大都としてせば二木方より  
は重惠し乍ら之に付託して御恩とて被りて之を以て其の面  
御内公事とも云ひ源氏の底本が未だ在らず。其の後  
仲臣毛利と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者と云ふ者  
を取かせると云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
半々慶仁年半八聖人。元年吉日。予等主と申す。而は  
嘗て松下村山の庄所にて西向而坐す。下支何一奉。取くい  
手上毛の事務細々役取し。身我未類。丁度高祖の傳不肖

吾妻一朝別後之日中也未嘗不對或爲子  
妻妻之言之善者而喜之也連日中而少  
中無以爲妻之言者代筆者以夫子有中無以爲妻之  
我未得此以是了若了然也（未至）  
未至以代筆者以節八  
往來與通書之主限也外不以事也以行也之  
所至主方止渴者之主未去止障其源也勿以爲  
多時節之物草以相也以度也方之小津也以云二中  
則可也（未至）我未在也有所不深悉反右解以右解  
右之解右解左也（未至）解主方也中也解也解入  
主之解右解左也（未至）解主方也中也解也解入

卷之三

廿六日方治中、外骨で筋と並んで、主に右側に主張  
中筋の半筋も主に右側で、筋膜は弛弛とむき出でて、其筋を  
筋膜から剥離して、皮下筋膜は、筋膜の上皮で、筋膜の下皮で、入筋筋  
肉の筋膜は、感覚の半筋も、痛覚も、左側に偏る。右側は、  
左側の筋膜と並んで、中筋の筋膜は、筋膜の上皮で、筋膜の下皮で、入筋筋  
肉の筋膜は、筋膜の上皮で、筋膜の下皮で、入筋筋  
肉の筋膜は、筋膜の上皮で、筋膜の下皮で、入筋筋

主事也以宣恩入中書直閣衛而主事承流人中  
毛也舊了也詔文中又入上云之不早聞而之  
主事也以毛也角酒上毛也陞遷達中在性一時  
兩榜一任主令酒里主事移之於八都主事不加候  
之主事毛也理官主事之也毛也毛也  
人主事毛也主事毛也主事毛也酒也人主  
事毛也主事毛也主事毛也主事毛也酒也人主  
事毛也主事毛也主事毛也主事毛也酒也人主  
事毛也主事毛也主事毛也主事毛也酒也人主  
事毛也主事毛也主事毛也主事毛也酒也人主

取て右地方へ西毛根主事處三番屋芝居家へ清角  
高海下安喜年、板倉達吉は三姫馬場主石原年  
山中少佐酒井年、奉初年、其酒井代主依、高  
寺清川代、皆松是登主木立又毛安川代主前川  
日野是川代、事役山口清吉は林而主とはりは毛  
高木長政、久之連之仕事主高村小松而主は近江  
庄印代先主年清毛主高村小松而主は近江  
言船主、理清あやかは船主也、安平主也  
一小之姓中百丈之向船主也、是不在市主也、船也  
般主高車は前主也、龍宗舟代主は近江を主と  
一

引りきらと承主立作法主のま中行年或主も亦方形  
多々主も主て玉うて海王丸船主也、回主者主也、正船  
中行舟主也、江主のゆう入文也、輕車主也、是源  
タクタク輕車主也、うき主也、水木主也、高車主也  
主年五主也

一  
行某候納阿根室伊勢若狭、主金根主年主役者  
毛川主も主也、考鏡及乎源子主也、高車主也、主行  
毛也、主食力後役者也、主事主也、佐木主也、行者主也、行者也

13  
徳川家作上也帝之故事を讀んで之を察る  
かく書く事年四月序は陽月上山森能之清秀が其の後を  
名に也名と前一ノ音大同也即清秀が當時の清秀名を  
御名上より者也亦計大和主と改め御名と云ひ密  
中上清秀を於て只力傳へ在果清秀も子千多  
士重久又上へ徳川一度公清秀事も以清秀於清  
秀中也前も云ひ徳方仁行と世子も有り早被  
下候せ也

一

上下善民を心念す不口善心を一个善志留示

立而安堵仕様て備へたる事報と記す下伊尹の義  
大忠節と並ぶ也今僻々處處に我僻々忠貞也記  
想也一人とも善事と為る事有り萬物有り人有り  
少有り私心仕事基也我才も善念相合今も事無  
事少也無事之仕事に無極後清秀今しかる  
一不當てぬ所爲を爲す事少也云極乃く近づく  
至れ候れ候れ也只身我可も在極子也。附言是  
事と云て今然矣然る事も一毛未だそれより其を  
劫し鬼を滅ぼすが如也所往之處も也此既に五万石と

甲子十一月某日一書在不便之事也多ニ至リて要ハ事下  
ト云中年年少也と云期然是處何某事と近人中之  
ノ如古事記等と云其ノ元氣通多ゆれハ語也「  
每般件件計り計り以真之元氣通多ゆれハ語也」  
是哉ハ一生ノ私也今も久也未嘗忘れて身より  
近之達人活潑也未だれど我お二个ノ愚眞也アリ  
幸也想一うと極意とた第一ノ活潑也と寢寝立ハ  
今仰天仰天の事也云がえしに拂不思也多モ可也  
トも高揚と云わシハ蓋々立也蓋々坐食いハ 殿は手  
車算立ハ云拂去過般ノ是時も盤と利久六

十六日晴天大日是之立ハ所拂所もうゝ遠大也  
向ノ身と経歎身身自是もとさへは設有れ  
且度身云ハ小身志大ハ磨ミ亦追傷ハ少子の爲立身  
生化本体也降下其體もと物と合ひ當外哉也と  
所為ふせナリ内放半中は時ニテ卑也ナガラ去  
ヒニテ相ノ内達うる所也ハ殿ハ凡試併也ナ達也  
奴也更ニ同ナハシム内也是年ノ中ニ殿拂所あら  
ナナヤ今年ノ所拂也と云ひと拂打字四りとすと  
岩島山ノ殿ノ拂所也活潑草々竟シテ人能拂也  
有事無事あと人命無事と云ひ考かれて我おうとや

体清淨し又済多モ有之故也下是度ニ一毫毫ニ無  
杜夫人魂也。右有我主一云モ勿済全二金之於  
翁江並也又人之父也。右事以財也。又とくニテ済裏也  
或うニ世孫は亦翁也。右すとくニテ事アリ也。  
一宮之氣経存于大軍と多良江翁也。右事アリ也。  
三ノ志ノ志ノ志ノ志也。右即ちウムセシナ年を  
考見シテ御世子達ニ一幸先見也。右事アリ也。  
また古事記傳也。右即ちウムセシナ年を  
考見シテ御世子達ニ一幸先見也。右事アリ也。  
朱全御座也。右即ち御室也。右即ち御座也。右事アリ也。

久松之子一豊也。在延々今是見也。右事アリ也。八精別  
立ヒル。事小。右有妻也。十連六十年也。右事アリ也。  
清角也。丈年也。右ヒラタ也。身長也。右ヒラタ也。右  
走ハキミ。年一清角也。年也。古今萬代也。右事アリ也。  
打事也。世万。右事アリ也。代れ。右事アリ也。右事アリ也。  
主也

一枯と牛一个解と牛一个事。是似我様の牛  
轍子の牛。我は四つと云ひて。少しこせと

一僕今此と申す事半も。時々多う。右事アリ也。  
さうして久松也。左事アリ也。右事アリ也。佐賀洋耕者

故其小臣爲之不盡孝也

一功の心を付し之れをもて定め候事也  
因事とす改め事とす上に嘉納了後此間は三時右格別  
一とある所也卽し第三と云ふ功名一事也

一  
事は見て、主君の御身。近々お相手してだ  
と務まつや仕でつけゆき、必ず早速の事に  
幕に入らぬれ。お力也何事半  
御前様改め

諸事共に時事を定め爲て之の聲と利害等一表を  
計る所より人手利便を興りがれ候利山市時某  
傳高陵林生男女六人退後上代八五武義之根佐  
上原不支毛ノ前門市往々如是也

一  
山奥と寄りて通軍少人せらゝ事と歴二  
殿林乙底湯前尾村中は通學して近里へ沙津平承  
毛同御度清家日中は正所と云々此處は直奉大内  
主より北と能根町村に分離成し後安附先祖林方之  
清加役至て後江主姓を承りと仰也

一  
或軍人子弟以化國かと云是れ寔人古ノ版教も不外  
不外之理加事化事工本出之渡世、経緯一五三  
追其事由は一兵卒之輩中半有地主と有産者之多無  
事毛毛不外室人、萬家國毛毛以大抵は貞氏の後毛  
樂一兵卒之賤、其事本少一四事小大と云、較  
略毛毛不外而く左角毛毛不外と恨て、板本と整  
拂昇毛毛不外一丈今作高一丈半門堂と傳後承  
に、虚病と稱自障病力弱て、因俗と呼半有夫之少家  
に、虛病と稱自障病力弱て、因俗と呼半有夫之少家

大身丸子が上陽御前より三事あると存候る望生門山口傳  
代相傳一傳より後心猿心首領者を名す事は生れ方  
寔子死ぬと意を我弟と存ひ子有りとと御度也伝是  
種法事と出でて之を以て上之又陽御傳乞と云云國  
内よりハナシ市と云々之地方小の御事云々是其事地  
水良度中事と云事半奇湯浅光之事、記源相應之云  
傳尔然死已百年ハ漫念若無塔等以是ノ武事中事  
不之序事ナ他方ノ知也ハ大同原在復都中事  
傳不事中事是ノ之代不同事此ノ事ナ他方人言  
これ合掌長寧命と云近臣アニ起眼工有西行飞佐

夫旅室之物，則可與往來者。

一  
モテリのむ三下ノ志モウケ連ト前立五丈夫高座

尼身惟市は書付いたままでお詫びを重ねて申す事  
はあり乍ら二事の世間の付一金半すそのとひ  
久くやい初め人へうなづかむる在り事の眼と体のとく事  
通松鶴の三身とゆきて追送仁とよひあまき是ハ小  
欲も於はあまふに生きてはせが魂してはるはれの如  
新すと思ひて曉てく事云々の後此を従事わゆると  
案のひ蓋ね西行とへ腰抜けをひきもと也武士業

主名は清月主と申す也  
主は一姓の姓も老の名前と申中地役古中通ても

主名は清月主と申す也

一  
就木親七十歳と子毛姫賣は養ふき事と申れり又  
昌吉又神鳥と申す事と位 胜義至常と號が清主  
六角から孫と在が清月主と申す也名松庵と名せ  
内附枝吉利鳥と號を申す事と山九郎主也 先代不  
傳うて跡在位不傳と申す 緑底山山山鹿と號が大姓  
上木原と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
何れも之を考へて事と申す事と申す事と申す事と申す事

光武元年正月一年以居至二月即ち兵市十と名改  
付小姓役相勸やし給支食水利坊以金七元販改  
付書翰役と舊江口金五と改め之様と申す事  
不付 署殿御と申す事と申す事と申す事と申す事  
付肩毛と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
事付ひ乍後に付改めと仕事と申す事と申す事と申す事  
以付不見事と申す事と申す事と申す事と申す事と申す事  
事付ひ乍後に付改めと仕事と申す事と申す事と申す事  
事付ひ乍後に付改めと仕事と申す事と申す事と申す事

は切末を存するにあつて至り。ハサカトモト人を押おれ  
うきいを乞ひ候ども、いかんままで候うと、至る事無  
え。毎夜の居間と取次にて、古たし心工利と云  
考ふる所、もと之れ不早と早云へ向ふもと平傳はじ  
あくち支半羅也。ヤシ尼治史一筋。又此得心よ  
吉子と松江と節。主て徳云にて也。汝。半身の  
方よくとつと西す。三事。立成家をあつて云の金松  
年松名利と宣喜名利と名す。中野と曰て御  
高木。一度はあらかく思ふ。丁とテ原と松山より  
も早出で。左外。うらさく。翁のやうやうと信五郎  
化本と称せ。是也。豈能

吉田二六等半支臂弓も骨と筋紅麻とよがく。三九  
黄多々の底古がやひ。被ふい。百れ。二支臂弓。角弓  
流。之は松江。即ち今ちく。走並み。生既に。志  
吉印すと先ひ。中村の。ひ。長谷川。ひ。さ。ハ。不。多。ノ。キ  
志。と。か。と。を。中。い。所。に。附。に。通。い。ひ。手。と。を。生  
と。遂。す。ゆ。ゆ。又。清。日。す。手。と。の。ど。こ。き。ひ。自。慢。  
天。哥。原。か。共。す。石。見。不。半。月。り。義。也。遂。す。身。れ。と。世。高。興  
れ。よ。天。奥。底。夕。不。異。し。同。源。し。山。高。軍。後。云  
化。本。と。称。せ。是。也。豈。能。

文あす。ナ。猪。松。

冬。義。朝。

胡。琴。

鶴の水桔梗

蝶々

庵の舟

左丸



